

貞丈雜記

二之下

73

6592

4



門 73  
號 6592  
卷 4

昭和十九年四月五日  
三上於...  
二二二...  
寄

一大名の事今吾貴の人其事をさしう云古き記之書れ

法武按葦云先代將軍 先代ハ謙余 將軍をさしう云 の定あり一族大名を護

大名と次男ハ 大名トハ一國の事をさしう云 大名トハ田地の 名を多く持さしう云 一名トハ田地十三石ヲ云

一下薦之女房ノ事謙余年中行事云上薦ハ御一族之娘

中薦ハ奉公之娘下薦ハ御中居殿原之娘也

向名ノ事官職知要云御方ノ名ノ事北東北ハ方ハ ムキナ

上リ也南西ハ方角はとも聊おとも之方名と向名とハ方 カタナ

名ハあつてもともやともやとも也向ノ名ハ方名と向 ムキナ

宣流卿記永正十五年四月十二日中納言四條宰相越前息女西向ナリ又女房故其傳 云大納言中納言ハ成ハ家ハ羽林名家ト云ハ此上ノ名ト云ハ大畧向名ト云ハ

東向西向亦 ムキナ

雜記二

二五

親長卿記云長亨二  
年正月六日中御門  
室家東向未又明應  
六年正月九日北向  
親長卿同月十七日  
中御門大方殿西向  
田餘堂家吉  
又文明日ノ起十七  
年九月三日北北向  
以方左兵衛佐敷敷  
寛母儀云

永享三年八月十日  
八日御前落居表  
書云御靈殿雜字  
ト云見たり

一 御靈殿の事 簾中旧記云五月内裏伏見殿御靈殿  
より大なる御らす御あつた又康富記文安五年  
五月十日云予冬近  
衛殿の御靈殿御也云々按以靈殿ハ近衛殿ハ内裏居也

人物部

太平記五ノ卷大  
塔宮御前ノ事  
ニ云片岡ハ即天  
田邊モありあ  
ぬさやちをさ  
ししくおこし  
山伏ありぬさ  
うやきのあも  
ふれありし  
又鎌倉の赤の  
さよりぬりし  
やまのさ  
とくさ  
五音通又山工へ  
さきりさをも  
やまのさ  
さうやきのあ  
さうやきのあ  
り云云  
破石集六卷二月  
代ありんたより

月代サカヤを判る事 京都將軍お比まがハあり一皆ソウガ越後之  
又もとくさやちをさししくおこし  
うらも高あり今おれくさやちをさししくおこし  
さうやきのあもふれありし  
謙倉時代あり月代ハあり一車ありし  
も古の事ハ月代判る事ありし  
合我乃時常はくぬきをうらり氣のあせり  
さうやきのあもふれありし  
頭の上をぬく中なりをあらも也ハ秋月

雜記二

二十六



ノ記ニ云自件簾中時忠卿出首其鬚不正月代太示左大臣以下

云下時忠卿の月代見苦而色殊損事ハ冠多月一あともある

は逆上の氣流きき場う月代一成へ一武士

の曹下は月代一同一古一月代一事一あきき

く一隠一也結城合戦の結末物一結城七郎長朝

う切腹の跡を画く結城月代一額一毛一

残一画一結城月代の跡一画一今一家一月



代を一冠一下逆上の氣  
は堪一に一由一  
額一の毛一

月代一け一月代一す一也

一古代の人ハ一事一髪一の一

く一百一會一の一前一は一髪一ゆ一

ら一髪一ゆ一人一ハ一髪一ゆ一人一

み一前一は一髪一ゆ一也一も一髪一ゆ一の一

乃一こ一









ふかき事はいくさす事なむ也

一 髪をぬき又なるもの近世の事也  
京都將軍の時代  
人ハ皆常ニ剃ケ有也  
走所故実云御成在而  
佛供所走所廢也  
勢多子善慶院殿極以代謙田殿  
也  
大御酒ありて還御をも不知以多人はあふき  
一 髪をぬき又なるもの近世の事也  
京都將軍の時代  
人ハ皆常ニ剃ケ有也  
走所故実云御成在而  
佛供所走所廢也  
勢多子善慶院殿極以代謙田殿  
也  
大御酒ありて還御をも不知以多人はあふき

一 管領の房ハ之の髪ありて後名ニ部記  
一 髪を短く切つて結すは乱  
一 入道童子三人を禿小  
一 事取廻口は著あざ  
一 家物語盛衰記ハ又  
一 古ハ武士も公家のこと  
一 髪をぬき又なるもの近世の事也  
京都將軍の時代  
人ハ皆常ニ剃ケ有也  
走所故実云御成在而  
佛供所走所廢也  
勢多子善慶院殿極以代謙田殿  
也  
大御酒ありて還御をも不知以多人はあふき

一 髪をぬき又なるもの近世の事也  
京都將軍の時代  
人ハ皆常ニ剃ケ有也  
走所故実云御成在而  
佛供所走所廢也  
勢多子善慶院殿極以代謙田殿  
也  
大御酒ありて還御をも不知以多人はあふき

一 髪をぬき又なるもの近世の事也  
京都將軍の時代  
人ハ皆常ニ剃ケ有也  
走所故実云御成在而  
佛供所走所廢也  
勢多子善慶院殿極以代謙田殿  
也  
大御酒ありて還御をも不知以多人はあふき

ルハ店シモハ海島  
ノ毛ヲ又キ艶ヲハサシ  
金ヲ付ル事一切無ク及末代毎度驕  
飾ノ至也是ハ公家ノ事ヲ云ヘル也  
金ハ鉄漿ヲ云  
オハハグロノ事  
貞丈按花園左  
大臣有仁公  
後三條院ノ御孫也父ハ輔仁親王  
也後白河院ノ御猶子ニ成モフ  
殊外ニ衣文ヲ好ム  
あひ鳥  
帽子あども昔よりりりり物出来り由徳世徳物語神皇正統  
紀等に見たり有仁公花奢風流ヲ好ムあひりあまハ眉細ぬ  
き顔ヲ好ム  
鉄漿をぬき齒を黒め白粉をぬり紅脂をぬ  
る歎女のお子をすもり有仁公お始められぬ一装束  
の衣紋も鳥羽院の御代より始り由海人藻菝アノモクスもろくお同時  
也保元平治以来の合戦より家より向り大将ハ皆右の風

鳥羽院の比ヨリ朝  
廷の作法諸の改事  
ハ札タリ

平家ノ公達皆多蒙  
ノ人ナルユヘウス  
ケシヤウニ眉作リ  
カ子ツケナトセラ  
レシ也

武士齒を黒むる事アノモクス海人藻菝アノモクスニ云鳥羽院ノ御代の前ハ男眉  
ノ毛ヲ又キ艶ヲハサシ金ヲ付ル事一切無ク及末代毎度驕  
飾ノ至也是ハ公家ノ事ヲ云ヘル也金ハ鉄漿ヲ云貞丈按花園左  
大臣有仁公後三條院ノ御孫也父ハ輔仁親王殊外ニ衣文エモンヲ好ムあひ鳥  
帽子あども昔よりりりり物出来り由徳世徳物語神皇正統  
紀等に見たり有仁公花奢風流ヲ好ムあひりあまハ眉細ぬ  
き顔ヲ好ム鉄漿をぬき齒を黒め白粉をぬり紅脂をぬ  
る歎女のお子をすもり有仁公お始められぬ一装束  
の衣紋も鳥羽院の御代より始り由海人藻菝アノモクスもろくお同時  
也保元平治以来の合戦より家より向り大将ハ皆右の風

俗ありし武士も此風接りて京家此武士皆鉄漿カ子付る  
事ありし海人藻菝アノモクス源平盛衰記平家物語等忠度タカノリの最  
後の条身方の中より初付する者ハあま物モノをとりて源  
氏の兵士が忠度のうき付する所なり云々この詞あり是東山  
の武士ハうき付するあま人のうき付するものを考べし此  
条五代記又小田原オダワラ松とて皆人あまなり常松トシノリ放言ハシラゲも忠臣  
ハ二君は仕へる黒色を愛せざるが故に鉄漿カ子とすとも侍  
多る人ハ老若共齒黒をまめひぬと云々りきも小田原  
の北条氏茂ハ評雲ヒラクモ入道元ハ京都將軍の政所伊勢イセ守平  
貞國の三男あり伊勢新九郎貞辰と云々人ヒト也えハ京の人

あるは東國ありても京の風俗を改めず齒を要知し作ら  
 且一帯中の侍皆う稱付し也元來の義より稱付初と稱し  
 好色は風俗より起る事ある後より稱付の儀禮儀の極  
 公は若武者ある迄う侍は不行儀の極と公稱するは  
 誤あり今世より起る事ある後より稱付の儀禮儀の極  
 今ハ武士う侍は若者ありて是より上右の風を立之り也  
 一女の齒を要知るも久しき事ありて始は志をす紫式部日記  
 寛弘五年十二月の条に流し日前の夜ついで追那日ハいとせらるるぬ  
 望南く黒め川付けあどはうあきつらうむともすともうち  
 けあくもよまとま栄花物語のうむのま万壽二年正月廿  
一巻は性物語下

二日の条は馬のハ又このぬいしをきくあふしとやうら  
 をごよこを侍らハ初あどつちもあり又あきとあ  
 いは遠く馬川付けあど公のどうにわがあ假を註し  
 みうくもありと寛弘ハ一條院の年号也万壽ハ後一  
 條院の年号也此はさううぬ付るふ名えと望ハは始に  
 久しき世より始りし成也右表書はもとくうの川付  
ありこれいうの相あり  
 一女の刺殺あどるをあふとと又比ヒ血ク尼ニとも云若ふあ  
 人のああはあれども髪を踏す判りあすのハ那  
 くら髪を短く切つ髪カはカあり也これをもあきああ  
 云也源氏物語さうととむの巻は若きよげありは

あざりて我をさすすてこれぞひるものちどらぬういせる  
すすにしようありてさるういよむむやうなり 三  
此物語女三ノ宮に外あまふありしるさほをさける  
ハ皆そごあまふあれるわいふあり そくしん殿の先をさるうい  
あうれさういそいあうい  
如 若もいやく女あざり刺殺あつても也

一横眉も眉お事光源院殿御入服記云御髪乱サレ

童形の時 元服以前之 御眉ハ毛、マエ也御烏帽子召サレテ横眉也 三 横眉ハ

俗ニ是松天井眉ト云ひこく末うすく匂をせしう余り  
目の方へ物さううもあつて又何あり引入り髪の中へ入  
たるも悪しうも眉と云ふ詳し初まづこれ共考へ記す

まゆハ茫々眉と云ふをまゆ眉と唱てそれをも眉と云遠  
くもまゆ併法々眉は自身の眉毛乃中へ細くすみま心さ  
くまゆ之額別子作るも非す又拂きまゆも眉ハ柳の葉の類  
二ツ額よまゆの乳 眉のよ  
二ツ額よまゆの乳

一女眉凶事の時拭事大永六年五月二水記云後柏原院崩れ  
糸眉々事崩脚々後親王以方令揮変々事先例如何明  
應々度事女中皆失念々今度先被拭親王渡御々日  
有御眉渡御倚戸々後又拭々還御本殿々時同々諒  
闇中無御眉々女中眉終不拭之崩脚々後皆以淡黛  
也若殿上人同々々按男女共崩脚々時ハ眉を落すゆ

と名也今世女ハ凶事の村ハ眉ヨ人ヲ入サズト云モ是ヨ  
 リ中一ヨアノ一室早家ヨモ公家ノ故実ヲ用ヒテ出  
 結一故旧記ハ凶事ノ村女ノ眉落サズ名ノミ共存  
 べキ故実也眉ヨ人ヲ入サズト云事ハ旧記ヨ名及ミテ

人名之部

苗氏ト云字代  
 書ニ見テ中古以  
 来ノ事ト先祖ノ子  
 孫ヲ苗高ト云ニコ  
 リテ苗氏ト云

苗氏ト云ハウヂ也多クハ伊勢。細川。畠山。高野ノ類也苗  
 氏ト云ハ子細ハ福妻アトノ生ノ初ノ村ヲ苗ト云ケル  
 先祖ハ何家ノ苗ノ如クハ先祖ノ名系リ始ケル氏有  
 加苗氏ト云也又名字ト云ハ別ノ家也昔ハ氏ノ事ハ  
 又限サズ人ノ氏モ名モ実名モおトコト云調也舊  
 記ノ内ハ苗氏ノ名ヲ名字ト書ク事モあり勘弁ト云  
 由リテ苗ハ一書ノ義理ハ意遠也

一 太郎ハ惣領ノ子也次郎ハ二男也三郎ハ三男也今ノ世  
 二 惣領ノ子ヲ何次郎何三郎ト名付二男三男ハ何

父ノ名太郎トレハ  
 其子ハ小太郎ト云  
 其小太郎ニ子アレ  
 ハ又太郎也二郎三  
 郎以下同断也二郎  
 太郎ト云ハ二男家

ノ太郎也又ニ近衛  
云三男家ノ太郎  
ハ三郎太郎又ニ太  
郎也四郎太郎以下  
神テ和ヘシ

近衛者ノ下ニ近衛  
ト云官アリ無任也  
兵衛者ノ下ニ兵衛  
ト云官アリ無任也  
衛門者ノ下ニ衛門  
ト云官アリ無任也  
今世下賤ノ者ノ各  
ニ兵衛衛門ト付ク  
ハカノ無任ノ者ラ  
似テ付クモ右ノ  
無任ノ近衛衛門兵  
衛トハ至テ下賤  
ノ者也

太郎と名付るもあり何やまり也又平氏の人ハ平太郎平  
次郎あどと名付る事あり又平氏の子に源太郎源次郎  
あどと名付るあやまり也各家ノの氏を名乗るべき也  
提原  
平次  
景時カ嫡子ヲハ平太トコフ云フベキヲ源太郎景時トイハタリイウあり故源字ヲ頼朝ヨリ賜リシ状此事古  
くよりあり付ベカラズ景時ハ頼朝ノ寵愛ノ目ナリシ故源字ヲ頼朝ヨリ賜リシ状此事古  
書ニハ見サレドモ道理然ルベキ也提原ノ  
家譜ニハ子細載テアルベシ尋子見ヘシ

一 今ノ世何兵衛何右衛門何左衛門あど百官名ありあど  
かゆる人ありあやまり也兵衛右衛門左衛門ハ皆官の名也  
源氏の人兵衛の官ありしを源兵衛と云平氏ハ平兵衛  
藤氏ハ藤兵衛橘氏ハ橘兵衛也  
橘トキ  
同トキ 右衛門左衛門も是  
准し知べし又太郎の人ハ太郎兵衛二男ハ次郎兵衛以外

也抑し了る  
清原氏ハ清原衛上善氏ハ善兵衛  
又皇氏ハ文兵衛あり云也

一 權兵衛權右衛門あど權の字も官名何の官ハ幾人とも  
定法ありあゆる人人数不足の時ハ人数を増し役を勤  
免するを權官と云たるハ左衛門佐一人の定法を共勤  
方事あゆる人数不足あゆる今一人左衛門佐を増し被  
仰付杖權は愚佐と云也猶官位の部を名合了る也  
一 何内と云名ハ内舍人<sup>ウチノリ</sup>と云官ありし人源氏ハ源内平  
氏ハ平内あどと云也以外准し知べし内舍人<sup>ウチノリ</sup>者左衛門  
尉を兼る人源氏あど右衛門左衛門尉を兼る也  
氏官職

雜記二  
アリ

追考古記ニ載ルハ  
ルハ何藏ト云タル  
例ヲ見ス

一 何藏サウト云名ハ藏人クラサトノ職シヨクニありし人源氏ヒナシホシテ源藏

友原氏ホシテ友藏ホシテ云々外准ヒナシノ名ナ一ヒナシ平氏ヒナシハ平藏

一 何作サクト云名ハ修理シユリノ官クニニ成ナル人清原氏ヒナシホシテ清作

平氏ヒナシハ平作源氏ヒナシハ源作ヒナシ太師ヒナシノ人ヒナシハ太師作ヒナシ源氏ヒナシハ源作

作ホシテ云也修理シユリノ唐名カニナニ匠作ヒナシト云故何作ト云也

一人ヒナシノ氏ヒナシハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人

ありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人

中ヒナシニ源平藤橘ヒナシハ天子ヒナシより出ヒナシル氏ヒナシありし人ハ源平藤橘ヒナシハ天子ヒナシより出ヒナシル氏ヒナシありし人

一 重フエト云家筋也

一 重フエト云家筋也

追考古記ニ平作源氏  
作ハ源平藤橘ト云タル  
例ハありし人ハ源平藤橘  
ト云タル

四氏ヲ四姓ト云ハ  
マツマリ也

源平藤橘ト云書ニ  
モ見タリ

四天坂氏云姓ト云  
ハ味ナリ

備ノ字モマロトヨ  
ムニ日本紀ニ見ユ  
麻呂ハ男子ノ通称  
也西土ノ人ノ名ニ  
何子何父何夫何甫  
トハ、云ニ同シ

名をやらせし何太師何太師ホシテ名をやらせし何太師何太師

何ヒナシト云名ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人

一 何ヒナシト云名ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人

男子ヒナシノ名ヒナシハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人

のくもも唐ヒナシノ字付ヒナシし人唐ヒナシ蟬唐ヒナシ仲唐ヒナシ田村唐ヒナシノ類也

太郎次郎ヒナシノ郎ヒナシノ字ヒナシも男ヒナシノ事也唐ヒナシト云同也

一金王ヒナシ箱ヒナシ王ヒナシ菊ヒナシ王ヒナシ野ヒナシ王ヒナシホシテ王ヒナシノ字ヒナシハ徑基ヒナシ王ヒナシノ名見玉ヒナシホ

ト云名ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人

五ヒナシノ字ヒナシハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人ハ源平藤橘ヒナシノ口ヒナシニありし人

或書云義平ハ伯父ノ義廣ヲウチシニ依テ惡源太トヨバレ景清ハ伯父ノ大日ト云禮ヲコロシタルニヨリテ惡七共周トヨビテラハシタリ云々又東鑑卷三十四ニ

も此の如く名あくもてて悪せしむべし王孫と天子の御子をば何ぐの親王と云は親王の御子を何ぐの王と云親王のり五代の進を王孫と云は何ぐの王と云也六代の名目下はぬれ也

一蒲冠者未曾冠者河内冠者あどの冠者ハくもどやどらむ也冠者と近き比え服し多しつらき者のみ也様樂極言より記侍のみ叔太師冠者とも同し也

一惡源太惡七共源惡は所あどの惡の字ハ自名ニ付て係り多あらず惡事ある人を他人より名付けしよびあらしむるあり古き書は惡の字をそくし惡何ぐとあり

惡源ノ職掌常陸國  
 兩井ノ巨ノ惡列管  
 家室下云人博奕ノ  
 科ニ依テ神體ヲ取  
 リテテラレシ幸見  
 文リ博奕ニ付テハ  
 稱ノ惡吏アリト  
 ナルベシ  
 東鑑卷下ニ下妻  
 四郎伊勢守志保頭  
 又東鑑卷四ニ武  
 田伊豆入道光遠ノ  
 次男信忠ヲ惡ニ  
 ト号ス信忠又ニ善  
 ニシテ武勇人ニ勝  
 レケレ此心謀計  
 ラス依テ父光遠ガ  
 信忠ヲ殺絶シケル  
 事見タリ

ハ皆多知人の悪事ありあし知し

一足利殿時代の御養帳に土岐厚駿河守土岐小左衛門福壽丸  
 奇藤小廣孫左衛門土岐深坂次郎土岐小橋式部少輔佐々  
 木迎福寺五郎遠山神濟左京亮土岐外山遠江守土岐肥  
 田瀬官内少輔土岐久利五郎土岐稻保刑部太輔土岐今  
 峯孫五郎武田下條甲斐守遠山飯沼内少輔遠山安  
 木孫太師遠山梯系五郎佐々木京極加賀守伊勢仁本左馬  
 助新田岩松兵衛頭新田大嶋左衛門佐々木名あり是  
 等ハ同氏多き内分を出てて家々より各外に氏を付て  
 今の氏と今の氏を二重のうら又友民於中勢少輔と



云々あり是の故に氏より民部少輔と中務少輔と官を二つ  
 兼ふる也又細川淡路中務少輔と云々有是と淡路と中  
 務少輔と官を二つ兼ふる也又佐々木大原備中判官と云  
 々あり佐々木大原ハ氏を二重子と云也備中判官ハ備中守  
 と檢非違使の判官を兼ふる也又波々伯那小法師と云々  
 あり波々伯那ハ氏を二重子と云々あり波々伯那と云々ハ氏  
 也小法師と云ハ名也古ハいふも有ハ名之入道云々あり  
 ず又伊勢駿河入道伊勢備後入道村上左京亮入道金季次  
 左衛門入道あど云々判官ハ奉公を勤ふる人之架  
 襖衣あどハあせす衣服ハ俗衣云々太刀刀をもち替す

色多向ハ云々あす犬追物笠懸あど射る時ハあん  
 泥帽をわたり又笠をあす射る時ハ也  
あんい帽ハ今も檢校句當  
あどゆりくら法師うがる

也物

- 一古ハ中間ハ苗氏を名あすさるの役名の部ハ記ス
- 一何太夫と云名ハ五位ふありと云人の名也五位ハ云々  
タイウトスミテラ  
ダイブトニゴルハ又別
- 五位の人ヲ諸太夫と云也  
諸太夫ト云フトキハ  
ダイブトニゴル之
- 人五位ハ成と云ハ源太夫也平氏ハ平太夫若急氏ハ若  
 太夫橘氏ハ橘太夫  
吉太夫ハ同  
橘ハ吉ハ同
- 清原氏ハ清太夫三善氏  
 ハ善太夫あど云也又太師の人ハ太師太夫次師の人ハ

德考  
百華凌云將門逆乱  
有六慶二年十一月  
始散露ヲ領東ハ國  
本官給仕國司也  
除日大目以下文武  
百官皆以點進但所  
關者將博士計也  
此文ヲハ將門  
別ニ官ヲ作タル  
ニテラズ大目ヨリ  
以下百官ノ号皆禁  
廷ノ官号ヲ用テ唯  
曆博士バカリヲ關  
タリト也曆道ヲ知  
タル者ノ十カリレ  
故ナルヘシ右ノ通  
ナレハ今世ニ云フ  
東百官ノ号ハ將門  
カ作リシニハアラ  
ス

次高太夫あり云也又左近太夫掃部太夫ありとのみ官位  
の部は記す

一 伊織。小膳。左門。多官。要人。藏主。左膳。右膳。藤馬。求馬。  
久馬。あり云名を東百官と云禁裏の官名に似たるもの  
百官と云成べし京都の官名にあはるる如東と云名  
とべし平親王將門下總の國は都を立し時定る官名  
也と云誤り也古書は東百官の名付る人久えす近  
代關東は武士の名は左門伊織藤馬平馬ありしは  
名あはるより東百官といひ習しるを將門の定し  
官名ありし附會しる也官名に似たるやうあるもの

東百官といふあり

一名系字或かへて事上たありし也日本ハ上古  
ハ文字といふ物あり人王十六代のみりと應神天皇此十  
五年御即位あり百濟國より百濟國ハ今のロウニシ王仁トといふ博士カセを  
きたりし博士といハ十六年日本は液り来り皇子免道稚即  
子也を師モロクし諸の書籍を学びあひし由日本紀に  
見えしなり是日本ハ文字液りし始也此世をいふと文字  
液りしをいふハ人の名系も口ウチをいふをいふありて文字  
又書くるハあり文字は書くる事あり世ハ此名系字を  
くもしりありハ名系も也名系字反カヘスりしりありあり

新羅國  
高麗國  
百濟國  
古三國ヲ三韓ト云  
後ニ二ニ合テ朝鮮  
ト云也  
字をくへりしり  
るハ二字の考を二  
りて一字の考を  
る事なはるハ眞  
丈の二字をくへり  
ハ長トありて讀  
ト云書を以テ字を  
くへりしり  
やうハ觀字者の知  
るなり  
吾朝切竟ノ字ト十  
ル又朝義ノ切トレ  
テサカサマニカヘ  
セハ智ノ字トナル  
身モ智モ吉字也然  
ルニ極義朝ハ父為  
義ヲ弑シテ其後家  
僕長田庄司力為ニ  
弑シレタリ名乗ノ  
字吉トテモ心正ニカ  
ラス身直十ヲ子ハ  
ワガハヒニ達也名





紀

一 斯波<sup>シバ</sup> 武衛<sup>トウ</sup> 細川<sup>ホシカ</sup> 足利<sup>アジカ</sup> 尾張<sup>オウカ</sup> 畠山<sup>ハシヤマ</sup> 仁木<sup>ニキ</sup> 荒川<sup>アラカハ</sup> 吉良<sup>キラ</sup> 東条<sup>トウジョウ</sup> 今川<sup>イマカハ</sup>  
淡川<sup>タンカハ</sup> 石堂<sup>イシドウ</sup> 一色<sup>イツシキ</sup> 小俣<sup>コマタ</sup> 山名<sup>ヤマナ</sup> 見岩<sup>ミイワ</sup> 松井<sup>マツイ</sup> 新田<sup>ニシタ</sup> 大館<sup>オホタテ</sup> 堀口<sup>ホリグチ</sup>  
得川<sup>トクカハ</sup> 世良<sup>セラ</sup> 田<sup>タ</sup> 等<sup>ナド</sup> の家<sup>ノイヘ</sup> ハ皆<sup>ナニ</sup> 京都<sup>キョウト</sup> 將軍<sup>シヤウケン</sup> 家<sup>ノイヘ</sup> の御<sup>ミコト</sup> 一門<sup>イツモン</sup> の家<sup>ノイヘ</sup> 筋<sup>スジ</sup> 也<sup>ナリ</sup>  
其<sup>ソノ</sup> 子<sup>コ</sup> 細<sup>ホシ</sup> ハ京都<sup>キョウト</sup> 將軍<sup>シヤウケン</sup> 家<sup>ノイヘ</sup> 畧<sup>リヤク</sup> 系<sup>ケイ</sup> 系<sup>ケイ</sup> 乃<sup>ノ</sup> 末<sup>マタ</sup> 子<sup>コ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 一<sup>イツ</sup> 也<sup>ナリ</sup>

一 姓<sup>セイ</sup> 尸<sup>シ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 事<sup>コト</sup> あり 姓<sup>セイ</sup> ハカバ子<sup>コ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 氏<sup>ウヂ</sup> ハ源<sup>ゲン</sup> 平<sup>ヘイ</sup> 藤<sup>トウ</sup> 橘<sup>キバチ</sup> を始<sup>ハジメ</sup> とし  
さあ<sup>サア</sup> の氏<sup>ウヂ</sup> あり 尸<sup>シ</sup> モカバ子<sup>コ</sup> トヨム 姓<sup>セイ</sup> ト同訓<sup>ドウクン</sup> 也<sup>ナリ</sup> 源<sup>ゲン</sup> 朝<sup>チウ</sup> 臣<sup>イン</sup> 藤<sup>トウ</sup> 原<sup>ゲン</sup>  
朝<sup>チウ</sup> 臣<sup>イン</sup> 平<sup>ヘイ</sup> 朝<sup>チウ</sup> 臣<sup>イン</sup> 橘<sup>キバチ</sup> 朝<sup>チウ</sup> 臣<sup>イン</sup> 杯<sup>ハイ</sup> の朝<sup>チウ</sup> 臣<sup>イン</sup> ハカバ子<sup>コ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 姓<sup>セイ</sup> ハさあ<sup>サア</sup> の氏<sup>ウヂ</sup> の  
尖<sup>ササ</sup> きと 賤<sup>セツ</sup> とを多<sup>タ</sup> かる 爲<sup>タメ</sup> 是<sup>コト</sup> 定<sup>サダメ</sup> たる 物<sup>モノ</sup> 之<sup>ノ</sup> 姓<sup>セイ</sup> ハ朝<sup>チウ</sup> 臣<sup>イン</sup> 王<sup>オウ</sup> 公<sup>コウ</sup> 首<sup>シュ</sup> 造<sup>ゾウ</sup>  
連<sup>レン</sup> 縣<sup>ケン</sup> 主<sup>シュ</sup> 村<sup>ムラ</sup> 主<sup>シュ</sup> 神<sup>カミ</sup> 主<sup>シュ</sup> 使<sup>シ</sup> 主<sup>シュ</sup> 人<sup>ニヒト</sup> 伊<sup>イ</sup> 美<sup>ミ</sup> 吉<sup>キチ</sup> 史<sup>シ</sup> 勝<sup>シヤウ</sup> 部<sup>フ</sup> 伊<sup>イ</sup> 吉<sup>キチ</sup> 直<sup>チキ</sup> 人<sup>ニヒト</sup>

姓ハカバ子トヨム  
日本紀ノヨミナリ  
尸ト同訓ナリ然レ  
ニ中古以来源平藤  
橘ナドノ氏ヲ姓ト  
云テ朝臣眞人ト  
トノ姓ノ事ヲ尸ト  
云フニナリタリ  
皆トリチカヘ也上  
古ノ書ニ尸ノ字ヲ  
用ズ姓ノ字ヲカバ  
子トヨム中古以来  
ノ書ニ尸ノ字ヲ用  
来レリ

稱<sup>ホウ</sup> 臣<sup>イン</sup> 直<sup>チキ</sup> 忌<sup>イミ</sup> 寸<sup>ソウ</sup> 氏<sup>ウヂ</sup> 阿<sup>ア</sup> 祇<sup>キ</sup> 奈<sup>ナ</sup> 君<sup>キミ</sup> 是<sup>コト</sup> おをり 姓<sup>セイ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 氏<sup>ウヂ</sup> 也<sup>ナリ</sup>  
りて 姓<sup>セイ</sup> も 尸<sup>シ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 清<sup>キヨ</sup> 原<sup>ハラ</sup> 眞<sup>マコト</sup> 人<sup>ニヒト</sup> 小<sup>コ</sup> 槻<sup>キ</sup> 宿<sup>シュク</sup> 稱<sup>ホウ</sup> 中<sup>チュウ</sup> 臣<sup>イン</sup> 連<sup>レン</sup> 酒<sup>サカ</sup>  
部<sup>ベ</sup> 公<sup>コウ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup> 姓<sup>セイ</sup> 氏<sup>ウヂ</sup> 録<sup>ロク</sup> 姓<sup>セイ</sup> 名<sup>ナ</sup> 録<sup>ロク</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup>

一 今<sup>イマ</sup> 乃<sup>ノ</sup> 世<sup>セ</sup> の女<sup>メ</sup> の名<sup>ナ</sup> 也<sup>ナリ</sup> おの字<sup>ジ</sup> を 氏<sup>ウヂ</sup> けり 姓<sup>セイ</sup> 也<sup>ナリ</sup> おの字<sup>ジ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup>  
歎<sup>ソク</sup> も 昔<sup>コト</sup> 多<sup>タ</sup> 有<sup>アル</sup> 一<sup>イツ</sup> の也<sup>ナリ</sup> 太平<sup>テイヘイ</sup> 記<sup>キ</sup> 分<sup>ブン</sup> 廿<sup>ニ</sup> の卷<sup>クワン</sup> 依<sup>ヨリ</sup> 本<sup>ホン</sup> 信<sup>シン</sup> 流<sup>リウ</sup> 定<sup>テイ</sup> 方<sup>ホウ</sup> 菊<sup>キク</sup>  
奉<sup>ホウ</sup> 殿<sup>テン</sup> 也<sup>ナリ</sup> 書<sup>カキ</sup> 事<sup>コト</sup> 也<sup>ナリ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup> 品<sup>シヤウ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup>  
あめめり 女<sup>メ</sup> 房<sup>ボウ</sup> 有<sup>アル</sup> 中<sup>チュウ</sup> 略<sup>リヤク</sup> おの字<sup>ジ</sup> の局<sup>キウ</sup> へめされ 姓<sup>セイ</sup> 也<sup>ナリ</sup>  
是<sup>コト</sup> を 以<sup>ヨリ</sup> 其<sup>ソノ</sup> 氏<sup>ウヂ</sup> の 時<sup>トキ</sup> 代<sup>ダイ</sup> 也<sup>ナリ</sup> おの字<sup>ジ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup> 女<sup>メ</sup> の 名<sup>ナ</sup> 有<sup>アル</sup> 一<sup>イツ</sup>  
を 知<sup>チ</sup> る 也<sup>ナリ</sup>

源氏や源姓平氏平

一 姓<sup>セイ</sup> 氏<sup>ウヂ</sup> と云<sup>イハレ</sup> 事<sup>コト</sup> 姓<sup>セイ</sup> 氏<sup>ウヂ</sup> の 二<sup>ニ</sup> 字<sup>ジ</sup> とも 何<sup>ナニ</sup> 姓<sup>セイ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 一<sup>イツ</sup> 也<sup>ナリ</sup> 云<sup>イハレ</sup> 歎<sup>ソク</sup> 也<sup>ナリ</sup>

一姓氏の二字を連用イヌ之漢之姓ハカバ子氏ハウジ也

亦れどもさけり委らふ時ハ姓ハ朝臣真人宿称連等也  
也長ハ源平者橘の歎也一後ハ子孫別ニ名系る号ハ氏  
をわさるる也源氏の内ニ新田氏足利氏畠山氏細川氏  
其外ありあり平氏の内ニ伊勢氏織田氏相馬氏有川氏  
等あり姓ハ木の根本の如ク一氏ハ枝葉の如ク

一源氏ハ人王五十六代清和天皇此皇子貞純親王源の氏乃  
元祖也平氏ハ人王五十代桓武天皇の皇子葛原親王元祖也  
藤原氏ハ天津児屋根命の末孫大織冠鎌足公元祖也橘  
氏ハ敏達天皇の曾孫葛城王元祖也  
源平者橘を四大姓と云天子は此  
亦ありあまふ也但大織冠ハ天子  
よあふけり  
神の末也

一公方お小者の名ハ事役名ニ部記ス

一氏の下ニ朝臣を著し名系の下ニ朝臣を著し是別の武  
雑書札篇ニ云氏の下朝臣の如きのみ著し可也又名系  
の下ハ四位ありさる者ハ書不ヤハ云三光院内府  
三條西  
院降  
御記ニ云源朝臣後原朝臣と書載ゆるハ位署を著し時  
之事ハ極多ハ法樂歌ニ

冬日同侍 太神宮社檀詠百首和歌

正四位下行右近衛權中將源朝臣具房

以朝臣の面向の時ハ姓尸を著載ハ内々之時ハ一而以累  
位尸除くハ又名字朝臣ハ四位雲客々々時ハ氏ハ是ハ人

位署書ノ事書札ノ部ニセルス

黄氏日記ニ云、嘗て  
 諱之所始、周之制  
 子孫承祀、廟中不敢  
 升其父祖之名、而  
 諱也、今人以壯無  
 諱也、今人以壯無  
 而多方、面避其名、  
 為諱、建教之所、  
 之而後、死其人於生  
 之日也

う書以自ハ不書といふ云

一諱といふハ父又ハ主君死一あり、後ハ子又ハ臣

る者ハ君又ハ父の生ており、まゝの時の名をいひて

るをいふ也名トハ名字彙ニ生曰名死曰諱とあり、諱ハ

死する人の存生の時乃名也、然るに今、時の人ハ主君貴

人あどのいふと死去せざるは御名をいはず、御

諱といふ風俗あり、多り生くる人を死人と同格と

する事いふ、此心ヲ黄氏日記ト云

一假名実名と云事古よりいひ、義經記ニ頼朝義隆ハ

うある人ハ假名実名をいひて、頼朝義隆ハ

本書物語卷八ニ今  
 ハ昔と係守半惟時  
 朝日トハハ貞盛  
 孫あり推時あり  
 みてうこれあるハ  
 也其市宮ハ家名ハ

あり、大紀ト  
 云者あり、云  
 假名ト書ハ悪シ家  
 名ト書ヘシ

使めて、カミヤウ

一東鑑卷十六宗尊親王の代乃記文ハ、伊勢左衛門尉伊勢前

行徳あり、ありハ桓武天皇の皇胤の伊勢氏ハあり、す我

家の先祖ハあり、す太平記ハ、カミヤウ

の皇胤あり、我家の先祖也

一元服乃時あり、親の名あり、一字あり、カミヤウ

後あり、カミヤウ

同撰ニ改事存也

一天台宗の寺の僧の名ハ、民部ハ兵部ハ式部ハあり、カミヤウ

東鑑卷五十一弘長  
 三年十月廿五日  
 奈ニ出御テ武州亭  
 外殿大政法を證回  
 入願依御座服也彼  
 上經者光明寺禪



せしきありこれ我朝のありて佛名ありあり

意樂ハ古代乃何はつき不めをすややをまよと云くこれわらあをほあつたのむすあり  
同朋ありの名又出雲の名も何阿といふハ何阿とて佛を果す何阿といひ又何阿といふ  
して何阿といふりといふあり  
本ハあまみこつあり

一後ノ字ノ事カズナガ和長卿日記曰凡儒中故實者天子之追号ツイカウ

後ノ字用音讀大臣称号之時後字用訓讀是通法之故

實也後深草院一号者用訓讀其様御不孝之讀不

聞好之義也ヨカラ又大臣称号後京極殿之一号人皆後字

用音欵是無殊事只以言好之義也故自由之讀也何後

ノ京極殿ト申事有其煩哉貞文曰後深草院ヲノキノフカウサノ院トヨム  
實也ゴフカウサト讀テハ卿不孝ト云ヤウニキ

ヨヘテワロキユヘノキ  
ノフカウサトヨム也

一女乃名子子の字似付事上代より的事あり日本紀欽明天

皇紀ニ云遺青海夫人勾子又云春日日狐臣女曰糠子と云

てり甘子子の字を付てり始あり

一小太郎乃事源平盛衰記源氏勢揃乃条河越太郎重頼

同小太郎茂房熊谷次郎直実子息小次郎直家又字治

合戦の条足利太郎俊綱子又太郎忠綱これ似

考ふよ何太郎何次郎とある人の子を小太郎小次郎

又太郎あり名のりしと云ふ又源氏勢揃条土肥次郎

実平子息孫太郎遠平とあり実平ハ二男ありハ次郎

と云ふは次郎が惣領ありハ孫太郎と云ふ惣領あり



の太郎は討つて孫の字を付たかありて又石橋合戦の  
各権頭季定子息萩野五郎季重同為太郎同小太郎と  
あり是ハ本父順を書遺つて萩野五郎の子小太郎成  
一 小太郎の子為太郎ありて権頭季定の曾孫あり  
考太郎といひしや

一 帯刀先生ヤシヤウの車帯刀の頭を先生と云也木曾先生あり  
云ハ本曾ハ在名先生ハ帯刀先生也

一 出世シユツセ乃事清僧ありをいへ云也又山伏ありをいへ出  
世と云あるもの有り惣してお家奴と云へ出世とい  
云也故実雜々圖書云門跡のお世ハ大略御供の對

多々ある歟云  
門跡ニテ役教相應ニ清僧ナルヲ  
サシテ出世ト云タルナリ

